

「講義の総まとめ」

★ この講義が「ねらい」としてきたこと

1. 専門資料を生み出す研究者が行動するしくみを明らかにする。
2. 専門資料の大まかな枠組み（一次・二次資料の区別、「学術論文」とその周辺，など）を示す。
3. 専門資料の具体的な例を示し，講義履修者自身の今後の学習（レポートや卒論作成に向けて）にも役立てる。

→ とりわけ，2.3.をめぐっては，「情報源の電子化」を「隠れたテーマ」としてきた。

【雑誌記事を手がかりにした復習(1)】

「科学誌はなぜ見抜けないか」（ニューズウィーク日本版 2006. 1. 18号）

※読解のポイント

1. 科学論文の評価は何を前提に成り立っていると言われているか。
2. 1.で示されていることにもかかわらず，どれだけの科学者（調査対象となった者）が不正を行っていると言われているか。
3. 「サイエンス (Science)」と「ネイチャー (Nature)」に論文が掲載されることの利点は何か。(3つ)
 - ・
 - ・
 - ・
4. 「選考委員」(=査読者)は，「ES 細胞」(皮膚，臓器などあらゆる体内組織へと発達するもの)に関する問題の論文について，どのような点を評価することになっていたのか。

※補足：この記事では捏造の防止について明確な解決策を示していないが，第 10 回の授業でのビデオで紹介されたアメリカの「研究公正局」のような「研究監視機関」の設置が，解決策のひとつだろう。

◆ このテーマに関するまとめ：研究者の行動と図書館

*多くの研究者は、(1)_____ (または研究所など) と(2) _____ の両方に所属する。

・(1)などでは専門資料をそろえる図書館や実験のための設備などを備え、研究者はこれらを用いつつ研究を行う。

・(2)は研究者が研究成果を発表する機会を提供する。とりわけ、(3)_____としての学会誌に掲載されるような(4)_____を通じて、研究成果の質が保障される。

- (4)における「質の保障」の手段として(5)_____があるが、これは研究者どうしの自発的な意志に基づいて行われる。これがうまく機能しないと「捏造」などの問題が起きる。

*図書館は(3)などの専門資料を収集したり、他の図書館との相互利用・相互貸借のしくみを整備するなどのかたちで、スムーズな研究活動を支える役目を負う。

【雑誌記事を手がかりにした復習(2)】

「地球をまるごと百科事典に」(出典は(1)と同じ)

※読解のポイント

5.ウィキペディアは「何型」の百科事典と呼ばれているか。

6.ウィキペディアの「固有の問題」は何とされているか。

7.ウィキペディアや、ほかの関連するプロジェクトの財源の多くは、何によって支えられているか。(手短かに)

◆このテーマに関するまとめ

: (6)_____の普及による研究環境や専門資料の大きな変化

* (6)の普及により、(7)_____化された二次資料の普及に加え、一次資料としての学術雑誌をそのままネット上で見られるようにした(8)_____が急速に発展している。

・(7)、(8)とも、有料であるものは(9)_____または(10)_____によって入手できるが、研究者が属する大学などの図書館としては、(10)によって研究者が(7)(8)を共用できるようにすることが求められる。(図書館の資料の共用と同じようなかたちで)

* 有料の(7)(8)に加え、NDL-OPAC (「雑誌記事索引」を含む) などインターネット上の無料の情報源も増加している。ただし、どのような情報源が信頼できるか、慎重な判断が求められる。

→ 有料・無料の様々な情報源に対し、図書館としては、予算の枠や利用者の種類も考慮しつつ、適切な情報源を選択することが求められる。特に無料の情報源については、どのような情報源に信頼が置けるかを(11)_____などによって利用者に示すことが望ましい。

* さらに、(12)_____, (13)_____が普及する兆しもあり、
「専門資料」の世界に大きな変動が今後生じる可能性がある。
(無料の情報源にこそ、大事な情報が含まれる可能性が増える?)
こうした動向にも図書館は注意を払う必要がある。

【専門資料のこれから】

* 専門資料は大学図書館・専門図書館だけのためのもの? 公共図書館ではどうか?

・「文系」に限れば、冊子体の二次資料(辞書、事典類)は比較的多いが、一次資料の入手可能性が問題。

・「理系」だと二次資料すら少ない。

* 個人で利用できるインターネット上の情報源(無料の情報源、有料だが低額な情報源)の増加
(各種データベースや Wikipedia, 無料の電子ジャーナル、機関リポジトリ上の論文や資料など)

→ 状況は変わる?

* インターネット上の情報源の利用にかかわる大きな問題:(14)_____

・(14)の定義:「コンピュータをはじめとする IT 技術(あるいはデジタル技術)を使いこなせるか否か(★)」によって生じる、人々の社会生活上の格差、および地域間、国家間の格差。

→ (★)の部分には 2 つの意味がある:

(a.) デジタル機器を操作、利用できるかどうか。

(b.) 情報の内容を理解し、その信頼性を判断できるかどうか。

→→ 上に述べたように、図書館は「インターネット上の情報源」のアクセス保障に積極的にかかわる必要がある。

無料の情報源の増加に伴い、(a.)に加え、(b.)にも注意を払う必要がある。「デジタル」なものに限らず、様々な情報源をいかに「読みこなす」「読み比べる」か、の問題)

*専門資料自体にかかわる問題

- ・ 専門資料の対象はあくまで、先に (レジюме p.1-2 で) 述べてきたような「研究者」。——「研究者」にとって理解できる用語や概念が、一般の人々にとっても理解できるとは限らない。
- ・ 特に「理系」には「用語・概念」に加え、ことば——より具体的には(15)_____——のカベがある。

*^{とよだりょう}常世田 良 (前・浦安市立図書館長。現・日本図書館協会事務局次長) 氏のことば:

日本が“「自己判断・自己責任型社会」を求められる社会に向かっている”: 日々を生きるための知識 (就職, 医療, 自治体サービスなどに関し) は上から与えられるのではなく, 自分で得なければいけない。
→ 「自己判断」のための材料として「正確な情報」こそが求められる。

“一部の国民だけに正確な情報が伝わるとしたら, 不公平が生じる。おそらく不満が出てきて, 社会不安の原因になるだろうと思います。”

(常世田良『浦安図書館にできること』勁草書房, 2003)

*知識を得るのは大学生活においてだけではない。卒業後においても絶えず知識を「更新」していくこと (生涯学習) が求められる。

→ 図書館は「専門資料」へのアクセスを提供することを通じ, そのための窓口となることが求められる。

さらに「専門資料」の世界の変化に, 研究者だけではなく, 図書館も, 一般の人々も対処していく必要がある。